

「大江戸えねるぎー事情」石川英輔／著 講談社 1990年3月発行
2階一般開架図書（請求記号：210.5/I）

鉄腕アトムで育った私たち世代は、かつて胸躍らせた未来世界が多分空想の産物であることを知っている。それらを実現するためには、現時点で私たちが背負っている課題はあまりにも大きく、容易には解決しがたい。

某国元副大統領の非常に悩ましい告発の映画を見るまでもなく、この日本でも環境問題の解決に寄与しようと次々とエコ商品が開発されている。でも解決のために新しく何かを作り出す、という一見前向きな「右肩上がり」的発想にそろそろ疑問を投げかけても良い時なのかもしれない・・・という薫風牙え渡る5月にふさわしからぬ後ろ向きな私にぴったりなのがこの本です。天然自然が与えてくれるエネルギーの中だけで完結させようと、ありとあらゆる知恵を絞った先人たちの工夫は環境問題だけでなく、私たちの生き方そのものにも問題提起をしてくれる。

立ち止まって考えてみませんか？立ち止まることは必ずしも負けを意味するわけじゃない。時には大きな勇気であり、英知の業でもあるのだから。

「兄の左手」徳廣睦子／著 筑摩書房 1982年8月発行
2階郷土資料（請求記号：K914/トク）

作家上林暁が二度目の脳出血で倒れたのは昭和37年11月4日のことで、近所の風呂屋の脱衣所で動けなくなった上林は、番頭におんぶされて自宅まで戻った。そこまでははっきり覚えているものの、その後救急車で病院に運ばれたことなどはまったく意識がなく、後になって、派手な音を立てて病院に運ばれたことを聞かされて涙を流した、というのは上林自身が「白い屋形船」の中に書いている。

周知のごとく、上林はその後昭和55年に亡くなるまで、自宅で寝たきりの生活を送ることになるのだが、そんな彼の身の回りの世話をし、口述筆記による彼の創作の手助けをしたのが、上林の妹である徳廣睦子さんであった。

本書は睦子さんが兄上林暁の思い出を綴る随筆集。半身不随で寝たきりになりながら、僅かに使える左手と口述筆記とで創作を続ける上林の姿には、文士の凄みを感じるが、その兄につききりで介護をし、困難な口述筆記を続ける睦子さんにも、上林と同じか彼以上の「文士」を感じる。あの情けなくも切なく不器用な上林暁の珠玉の短編小説のうちの幾つかは、睦子さんがいなければ世に出ていなかったかもしれない。そう思えば、上林の愛読者としては、本当に睦子さんに感謝するしかないのである。